長崎大学の
福島復興支援と
これから

世界の中でも「ここにしかない支援」

長崎大学が進める復興支援は「お手本」があるわけではありません。正解がない中で、悩みながら進めてきたものでした。まずはやってみることで確立する、「世界でここにしかない支援」と言えるかもしれません。

“原発事故からの復興にどう対応すべきか”に対する答えは、最初は誰も知りませんでしたから、自分たちで考えていくしかありませんでした。長崎大学は福島に入ってから、小さな成功例を積み重ねながら復興支援を続けてきました。

もちろん、長崎原爆やチェルノブイリで得られた知見はありましたが、福島で求められている支援の方法論は、全くなかったと言っても過言ではありません。答えの見えない課題にどう対応するか、そこでは悩みの連続でした。

ひとつの出会いから広がる支援

川内村の秋元美誉（よしたか）さんは、震災前は合鴨を使った無農薬のコメ作りを行っていました。ところが、2011年3月の原発事故で事態は急変しました。川内村が全村避難となる中、いったんは避難したものの、すぐに村に戻った秋元さんと妻のソノ子さんは、「作ってみないと米に放射性セシウムが検出されるかどうかはわからない」と、二人だけで米を作ることを決意しました。

この年、福島県の避難区域では米の出荷は禁止されていたのですが、ほとんどの村民が避難を続ける中、秋元さん夫妻だけは、黙々と米作りを行いました。2011年秋、秋元美誉さんは収穫した米を福島県の検査場に持参しました。測定の結果、精米したコメから放射性セシウムは検出されませんでした。放射性セシウムは米には移行しにくいことを、秋元さんはまさに自分の手で証明したのです。

その川内村に2013年4月、長崎大学が復興支援拠点を設置し、保健師の折田真紀子助教が赴任してきました。秋元美誉とソノ子さんは「これで村は復興できる」と喜ばれたそうです。二人は折田助教を自分の娘のようにかわいがり、長崎大学の力強いサポーターになってくれたのです。

新しい支援の形を作り出す

長崎大学は、川内村に続き富岡町にも支援を広げています。

富岡町で米作りを始めている渡辺伸さんは、「原発事故から時間が経ち、行政が帰還を促していますが、放射線だけで帰れる、帰れないが判断できるわけではなくなっています」と話します。子どもの学校や仕事など、避難者も新たな場所で社会的なつながりができているので、8年前とは状況が変わっているのです。

帰還を促すには安全性を証明するだけではなく、新たな価値を感じてもらえるような取り組みが必要になります。そのためには、帰還者が「帰ってきてよかった」と思えるような支援を続けていくことが重要です。富岡町で求められる支援に対する答えはまだありませんが、現場の声に耳を傾けて、「ここにしかない」新しい支援の形を作り出していくことでしょう。

川内村の秋元美誉さんと
妻のソノ子さん